



03 村松
66

神と我

人生は不思議なり、実に不思議なり。しかんも憂愁
堪へず。彼等し、憂はこれにして此憂愁より脱却せ
り自由を感ぜしむたり。

今や雨が先きの憂愁のうちに投せられたる
されば此憂愁を不重とせむ。

青三三

余は不信なり、信弱なるもの、満足せざるもの、憂足ら
ざるもの、罪多きもの、斯く感ずるは絶望の外あら
じ。然り絶望の影し、我を沈むるなり。

余は神はたの者と願ふなり。

人が其苦にして悩むる衣を着んと欲するは修補と云ふ
なり。神の人の用いむるは、これより賢く、これより正
しく、これより善く、これより愛し。

神は常に此書を用いむ。其正しき用にて用むるなり。

此信んこも我を絶望し、其相なり。此絶望は我
は絶望の神に預るの外あらじ。

(同上)

築

美事と云ふものはあらず。奇造すべしものはあらず。品
性の中にも、信仰と自信と信義と同情とあり。

(同上)
6

林くち



書籍は一個の世界なり。ここに山川草木あり、ここに英雄豪
傑、朋友知人あり。ここに人情の流あり、ここに感情の白れあ
り、ここに春風吹き、夏木繁る。而もここに一種の寂寥
あり、人を静かに黙想せしむ。此世界の深は心よりせき、
此世界の奥は肺腑よりあふる。
此世界を持つもの事あるか。まことの宇宙の中に在り、
まことの杜若の中に在り。

(三十二回)

彼等の生涯が見た。彼等の目を以て此世界が見た。こ
是れ則ち當時の余の彼等を見た。毎に起る同情であ
つた。何故に斯る同情が余に起たか。是れ又た當時
の余を回顧する毎に起る今の余の疑である。

6 彼等は田舎野人を目指す。
あつたは佐伯にけしめを指す。

(三十三回)

空漠然として吾れ等此日と夜を送りつゝ迎ふつゝある。これと
静に思ふ。吾れ等は不思議な宇宙に不思議な生活
をなし、大なる実の中に生活しつゝある。然るにこれに
見ると、何に渾身の力をこめて居る。現今の田舎

深

塾くち

中に此の世等常に呆然空漠と看する。さめよ、さめよ。

見る時は、若に洋甚曲を傳たに及ぶる事あり。現今の魚産屋

深

禁くも

中に於て其等常に呆然空懷と看過す。さめよ、さめよ。
また呼びかけし星は老聃か。星なり。又星か。仰せられたるは
吾等か。仰ぐ大空存るや。や、時固く、雨はふ。實に神形主に
も、されど、今これ實にたる實に非ざるか。

(同上)

鳴

嗚呼、くり大ケヤニテ、我があやうき苦惱を雨の懷中に
托せん欲し。

(十九)

是過去の生涯に於て尤も吾が悔ゆる一事は、余りに他人に
依頼したることなり。言ひ換ゆれば自己の利益のために先
輩、金朋友の盡力を求めたことなり。而して何の利益
を得や。のみならず、非難なる損失を爲したり。已れ此依頼の
ためた若に徳の立を失したるは、若に自個の品格を下
したるは、徳に侮辱を受けたるなり。且つ神のみなさう可き
聖なる吾を人の前に辱したるも、これ若に神をけがした
ることなり。自立、德行、はじめて信你生ず。何れされば、王
回たに神のみな雨の依頼をせはする。片言に首又後、
人に肩負ふことを思ふ。

何者をも恥ぢぬ、たに神を祀めよ。とに神を祀む、禁しむ

禁くも

人に利益を祀するゆへ。(六月辛酉)

何者をも求ふべし、たに神を求めよ。とに神を求む、冥に

塾くち

人に利益を及ぼすなり。

六月十五日

余が兄の二個の世界は空と空と人の世界なり。一個はカニの世界なりき。

(二月二十七日)

(六月辛七日)

余は、何事も是よりまじき事に憚りし者なり。外部
の事情も内界の潤和も余には破れ居る也。

恥と慥と恋と、三個は相排撃しあつ、各が内部に戦ひ、
これ信よに因する戦なり。而して、各々の心と、互に向ふと、
想と、自清の逸業の心と、これに相排撃しあつ、各が内
部で戦ふ、これ世に因する戦なり。而して、此種の戦は相
戦ふと一程よりあつ、苦悩と老に怨、熱き室の

に家内せふ、吾作のに害多しき、氣塊の縣が、
呼吸を塞ぎ、左汗あせあせくに痛き出づるを、
苦惱を感ずるもの他にありや。

意、取、懐、悔、名、利、神、定、心、聖、地、の、元、素、を、
其、化、身、は、毒、血、に、成、り、て、吾、心、に、侵、入、す、る、也。

クリストと神の間に信じて得る者は救はる。此等の苦
悩より脱するを得。余は之を知り、亦、實に今をたこれ
を感ず、痛感せんことを！

クリストを神の一リ兒と信ずる。これに由りて此世界を^見る。目のやめに亦たするも。自己を自覚する。客の爲に之をみる。客を他人に對する。情の如何に深きに起くもの。之を^見るには疑惑あり。信仰極めを待たし。

塾くら

國木田獨步日記原稿斷簡

特別

文庫14

A36

